石川 ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

れきはく

No.142
2023.4.14

令和５年度
春季特別展

碧（あお）の海道

－古代の日本海交流－

令和５年（2023）4/29（土・祝）
〜 6/11（日）

国宝　銅鐸　島根県加茂岩倉遺跡
国（文化庁保管）島根県立古代出雲歴史博物館写真提供

令和５年度
春季特別展

碧（あお）の海道

―古代の日本海交流―

開催日時 令和５年 4/29(土・祝)－6/11(日)　会期中無休

石川県は日本海の南岸の中央部に位置し、古代から大陸の文化が流入する海の玄関口になってきました。弥生時代には中国や朝鮮半島から日本海ルートで青銅器や鉄器がもたらされ、北陸地方は東日本へ広がる流通網の拠点になっていました。交易の対価として、翡翠（ひすい）や碧玉（へきぎょく）を用いた宝玉が盛んに生産され、西日本に広く流通していきました。
さらに、古墳時代の終わり頃の570年、朝鮮半島の高句麗（こうくり）から使節が加賀に来着しました。この時に開かれた外交航路を通じて、奈良～平安時代にかけて日本海の対岸にあった渤海（ぼっかい）の使節が加賀・能登を往来しました。渤海使船の寄港地として有名な福浦港のほかに、現在の金沢港の周辺にも古代の港が存在したことが明らかになっています。
本展覧会では、日本海沿岸の各地や朝鮮半島・中国大陸との交流を物語る資料を多数展示し、日本海を舞台にした壮大な交流の歴史をたどります。

翡翠勾玉（ひすいまがたま）

【佐賀県宇木汲田遺跡】【佐賀県立博物館蔵】
九州北西部の甕棺墓に副葬されていた弥生時代の勾玉で、素材の翡翠は北陸の糸魚川産と推定されている。

金製垂飾付耳飾（きんせいすいしょくつきみみかざり）

【福井県向山１号墳】【若狭町歴史文化館蔵】
古墳時代中期（５世紀）の金製の耳飾りで、朝鮮半島南部の加耶から伝来した金工品。

重要文化財　脚付桶

【鳥取県青谷上寺地遺跡】
【鳥取県蔵】
ヤマグワの一木から作られた精巧な容器。同じ器形の木器は弥生時代に日本海沿岸の各地に共通して認められる。

関連イベント

石川の歴史遺産セミナー（リレー講義）

要申込（定員各回50名／応募多数の場合は抽選）・聴講無料

第１回：５月13日(土) 13:30～15:00
　演題：「日本海沿岸の潟湖（せきこ）と弥生時代の拠点集落」
　講師：髙橋　浩二 氏
　　（富山大学学術研究部人文科学系教授）
第２回：５月27日(土) 13:30～15:00
　演題：「二仏並座像の謎に迫る－渤海建国の地と日本道」
　講師：小嶋　芳孝 氏
　　（金沢大学古代文明・文化資源学研究所客員教授）
　会場：当館ワークショップルーム

れきはくゼミナール

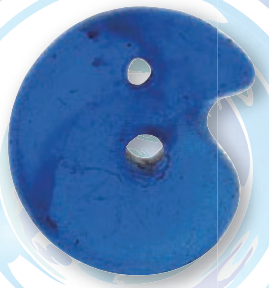
申込不要（定員50名／先着順）・聴講無料

日時：５月20日(土) 13:30～15:00
演題：「舶来品でたどる古代の日本海交流」
講師：三浦　俊明（当館資料課長）　会場：当館ワークショップルーム

展示解説

申込不要・特別展の観覧料が必要です

日時：５月７日(日)・５月14日(日)・６月４日(日) 13:30～14:30



ガラス勾玉

【島根県西谷３号墓】
【島根大学法文学部考古学研究室蔵
出雲弥生の森博物館写真提供】

弥生時代後期～終末期（１～３世紀）に山陰と北陸地方に分布する四隅突出型墳丘墓の副葬品。素材は中国大陸産とみられるガラス。

花弁高杯（かべんたかつき）

【金沢市西念・南新保遺跡】
【金沢市埋蔵文化財センター蔵】

花弁形の浮き彫りがある弥生時代後期（２世紀）の木製容器で、山陰地方から運ばれてきたと考えられている。

金銅菩薩立像（こんどうぼさつりゅうぞう）

【渤海上京城】【東京大学総合研究博物館蔵】

渤海は中国の東北地方を中心に栄えた国で、奈良～平安時代に日本海を介した通交が盛んであった。渤海の王都で発見された希少な金銅仏。

柄付き鉄製鉇（えやりがんな）

【小松市八日市地方遺跡】
【石川県埋蔵文化財センター蔵】

北陸最古の鉄器で、中国大陸か朝鮮半島から舶載された。弥生時代中期（紀元前３世紀）に鉄器が使われ始めたことを示す重要な出土品。

銀製帯金具

【加賀市狐山古墳】【東京国立博物館蔵】 Image：TNM Image Archives

朝鮮半島製の帯金具で、古墳時代中期（５世紀）に築かれた南加賀の首長墓、狐山古墳に副葬品として納められていた。

申込が必要なイベントは下記の方法で事前にお申込みください。

【申込方法】当館ホームページのイベント参加申込フォーム または 往復はがき
【記載内容】●希望イベント名（希望回・時間）
●お名前（備考欄に参加者全員）●ご住所・電話番号

主催：石川県立歴史博物館　共催：島根県立古代出雲歴史博物館
特別協力：北國新聞社

【観覧料】
一般／1,000(800)円　大学生･専門学校生／800(640)円　高校生以下無料
(　)は20名以上の団体料金／65歳以上は団体料金
障害者手帳または「ミライロID」ご提示の方および付添1名は無料
電子チケットは当館ホームページよりご購入
いただけます(日時指定なし)
※常設展もあわせてご覧いただけます

ワークショップ
ミニ銅鐸をつくってみよう！

要申込（定員計15名／各回３名、応募多数の場合は抽選）・参加費無料

内容：低融点合金による鋳造体験
日時：５月21日(日)
①10:00　②11:00　③13:00
④14:00　⑤15:00
対象：小学生以上
(小学生は保護者同伴)
会場：当館ワークショップルーム

資料紹介

海を渡った碧(あお)い玉

資料課長　三浦　俊明

令和５年度の春季特別展は古代の日本海交流をテーマとし、メインタイトルは「碧(あお)の海道」と題した。この「碧」は日本海の澄みわたる青さを表すと同時に、この展覧会で展示する「碧玉(へきぎょく)」にちなんで「碧」の字を選んだ。「碧」の漢字は青緑の色調だけでなく、「石」の部首が含まれるように、青く輝く宝石も意味している。古代の日本海交流を象徴する字として「碧」に込められた含意を特別展の展示品で紹介したい。

「碧玉」は石英(せきえい)の細かい結晶が集まってできた鉱物で、弥生時代～古墳時代にかけて管玉(くだたま)や勾玉(まがたま)など、装身具の原料に用いられた宝石である。良質な碧玉が産出する日本海の沿岸では玉類の製作が盛んに行われ、特に山陰地方と北陸地方は弥生～古墳時代に玉類の二大生産地となった。石川県では加賀の山間部で碧玉が採れ、平野部にある集落に原石が持ち込まれて管玉に加工された。小松市八日市地方(ようかいちじかた)遺跡は加賀最大の弥生時代の拠点集落で、発掘調査で500kgをこえる多量の碧玉原石や製作途中の管玉未成品が出土している。また、新潟県糸魚川周辺で産出する翡翠(ひすい)の原石を入手して、勾玉の製作も行われていた。

小松市八日市地方遺跡出土　碧玉管玉・未成品
（小松市埋蔵文化財センター蔵）

石川県の弥生～古墳時代の遺跡では、碧玉・翡翠の原石や未成品に比べて、玉類の完成品が出土する割合は低い。自家消費量を大きくこえて生産された玉類は、北陸の地域外へ搬出されていったと想定できる。それを裏づけるように、玉類の素材を理化学的な方法で分析したところ、弥生時代中期の九州北部の甕棺墓(かめかんぼ)から出土した管玉と勾玉の素材は、それぞれ加賀産の碧玉と糸魚川産の翡翠との推定結果が出ている。さらに、鳥取県青谷上寺地(あおやかみじち)遺跡から出土した碧玉の素材や管玉未成品を分析した結果、全体の約65％は加賀産の碧玉の可能性が高いという。管玉の完成品だけでなく、遠く200km以上も離れた山陰地方に加賀産の碧玉の原石が運ばれていたことになる。加賀産の碧玉やその製品はかなり広範囲な流通圏をもっていたことが明らかになってきた。

弥生時代には、中国・朝鮮半島や九州北部から青銅器や鉄器が北陸地方にもたらされた。西からの交易品に対して、その対価になったと考えられているのが北陸産の玉類である。日本海を介した交易が発達し、交換財として加賀産の碧玉製品が活用されるようになったとみられる。金属器のような外部からの資源に人びとが依存するようになると、交易のあり方が社会に与える影響も必然的に大きくなる。弥生時代後期～終末期に西方から搬入された大型の鉄製刀剣は有力者の墓に副葬されており、長距離の交易を差配した首長が社会のなかで権力を持ち始めたことがうかがえる。「碧」の玉の軌跡を追いかけることで、弥生社会に大きな変革をもたらした日本海交易の実態が見えてくる。

鳥取県青谷上寺地遺跡出土　碧玉管玉・未成品
（鳥取県蔵）

学芸員コラム
Column

「スナックのママ」の銅像

学芸主幹　兼　普及課長　大門　哲

かつて金沢市片町は日本一スナックが多い街だと聞いたことがあります。裏付けとなる統計データは確認できていませんが、夜の片町に対して抱くイメージにスナックがあることは確かでしょう。では、そもそもスナックとはどんな業態なのでしょうか。辞典類にはスタンド形式の簡易な飲食店とあります。

間違いではないでしょうが、実際の印象にあいません。スタンドを挟み「ママ」を相手にほかの客も交え世間話やカラオケを楽しみながら主に洋酒を飲む場所といった方がわかりやすいのでは。労働者の慰労を支える大切な商売ですが、いまだその歴史の解明や地域の比較をすすめた研究はありません。

では、片町がスナック街となったのはいつからでしょうか。結論からいえば終戦後まもなくからです。とはいっても当時、飲食店が集中したのは片町の隣の香林坊界隈でした。かつて香林坊は映画館・寄席・遊技場などが集積する、金沢最大の歓楽街でした。

香林坊に飲み屋が急増するのは昭和26年頃からです。当時の飲み屋とはどんな様子だったのでしょうか。香林坊の古い住人に尋ねると、以前は、一般大衆はおでん屋、金持ちは寿司屋で飲むのが普通だったということです。おでん屋がいまの居酒屋の役割をもっていたわけです。確かに香林坊界隈の戦後の住宅地図をみると、おでん屋だらけです。

現在の瀧の白糸像

洋酒と女性店員との雑談を楽しむ飲み屋が登場するのも同じころです。当時はスタンドバー・バー・キャバレーの三種類がありました。キャバレーはボックス単位で女性が同席して酒を楽しむ場、バーは洋酒を楽しむ場で、残るスタンド・バーがスナックの原型となりそうです。

戦後金沢の大衆雑誌『新北陸』は、スタンドバーの女性店員を「マダム」と紹介しています。昭和30年代まではいまの「ママ」なる通称が一般的でなかったとわかります。その後、片町にも徐々にスタンドバーがひろがっていきます。ちなみにスナックという呼称が増えるのは昭和40年代半ばですが、昭和50年代以降も金沢の主流は「スタンド」でした。

ではそもそもママとの雑談などを楽しむスタイルはいつ生まれたのでしょうか。その源流と位置付けられるのが昭和初期に一大ブームとなったカフエーです。当時はジャズが鳴り響く店内で女給との談笑と酒を楽しみました。若い男性の人気を集め、市内には百軒余りが乱立し、とくに大阪から香林坊に進出した赤玉と美人座が有名でした。

スタンドバーがカフエーの後継的な役割をもったことは女性経営者の経歴からうかがえます。『新北陸』によれば、カフエー廃業後も、金沢に残り、スタンドや小料理屋を営んだ例が少なくなかったそうです。

なかでも有名な経営者が上田りつさんでした。りつさんは秋田県出身。赤玉の女給時代は気風のよさからインテリと呼ばれました。赤玉廃業後、地元の男性と結婚。まもなくして夫は病死。敗戦直後は闇市で働き、その稼ぎをもとに片町に自分のスタンドバーを持ちました。店は赤玉時代を懐かしむ旦那衆やインテリ連中で一杯だったそうです。

りつさんが有名だったのは銅像のモデルだったからです。浅野川河畔に瀧の白糸像を建てることとなり、その制作を請け負った彫刻家がモデルをさがしあぐねていたところ、偶然に入った店のママりつさんがイメージにぴったりだったため頼みこんだそうです。

いまも瀧の白糸像が浅野川河畔にたちます。実はその像は二代目で、モデルは東の名妓・美ち奴さんです。りつさんをモデルとした初代銅像は戦後の大水で流出してしまいました。残っていれば、金沢の繁華街の歴史の一端をうかがえる遺産となったはずです。

研究ノート

能登名跡図巻の世界

学芸主任　中村　真菜美

当館では開館以来、加賀・能登の風景を描く資料を積極的に収集している。その内の１点である「能登名跡図巻」は近世能登の景観を伝える優品として広く活用されてきたが、内容に踏み込んだ考察はなかった。ここでは、最新の調査成果を報告し、再評価を行いたい。

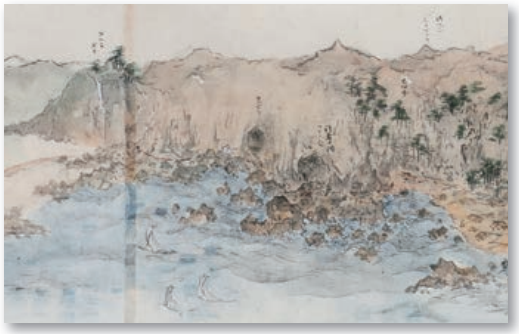
一、当館蔵「能登名跡図」の概要

当館蔵「能登名跡図巻」は紙本淡彩、全１巻（縦27.8×横2180.0㎝）。当館の収集時には本紙のみの「まくり」の状態で、落款等はなく、題は便宜的に付されたものである。

前半は能登の外浦海岸沿いに、現在の津幡町舟橋付近から先端部にあたる珠洲三崎までの景観を南北に描く道中絵図、後半は道中の景勝地をピンポイントで描く計10図の真景図（先頭から「無題(柴垣弁天島)」、「福浦之図」、「深見雄瀧之図」、「深見雌瀧之図」、「大澤なめ瀧之図」、「七ツ嶋之図」、「赤崎達磨石之図」、「狼煙大宇島小宇島之図」、「西海入海之図」、「高屋日より山之図」）である。道中絵図と真景図を組み合わせることで、観者は能登を「巡る」とともに、特定の名所をクローズアップして「眺める」ことができる趣向となっている。

全体を通じて、道沿いの地形を丁寧に捉えようとする姿勢が伺える。例えば、輪島の曽々木海岸では、珠洲の真浦までの経路として、岸壁を這うようにして通る「ひろぎ越え(ヒロク)」が克明に描かれている【図１】。波が打ちつける断崖絶壁に朱線で道が表され、見ているだけで身がすくむ。奇岩や滝への関心も高く、特に福浦から関野鼻までの一帯、所謂「能登金剛」の景は細緻を極める【図2】。輪島市内にある西二又の男女滝（なめたき）、赤崎の達磨岩は、道中絵図で目立つように描かれる上、真景図の題材にも採られている【図３】【図４】。

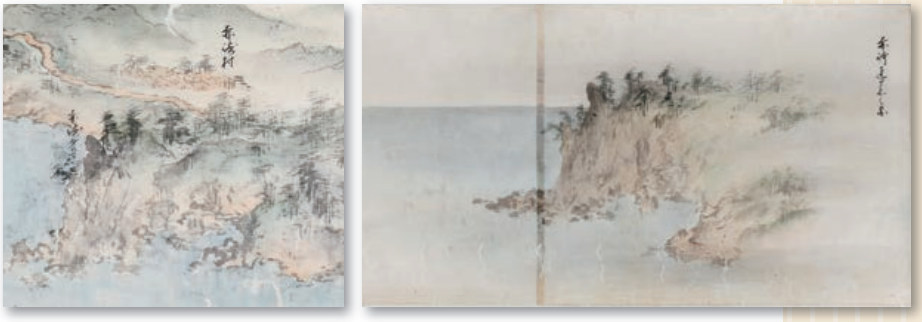
筆者については幕末の加賀藩士で絵をよくした岸井静斎（1826-93）とする伝承があるが、確証を得ない。海景を描く真景図において、水平線を低い位置で捉える表現や遠景をぼかす表現など、筆者の近代的な遠近法に対する理解が伺え、江戸時代後期以降の風景表現の傾向を示している。



【図１】当館本「能登名跡図巻」（曽々木 部分）

【図２】当館本「能登名跡図巻」（福浦 部分）

【図３】当館本「能登名跡図巻」
（大澤 部分、「大澤なめ瀧之図」）



【図４】当館本「能登名跡図巻」
（赤崎 部分、「赤崎達磨石之図」）

赤崎の達磨岩は平成19年の能登半島地震で先端部が崩落した。「能登名跡図巻」は能登の景勝地の在りし日を伝える資料としても重要である。

二、橋本家本の存在

当館本は道中絵図の巻頭部などに明らかな脱簡が認められる。そのため、道中絵図については、外浦海岸のみを描く現状が当初からなのか、あるいは続く内浦海岸の景が脱落した結果なのか判然としなかった。今回改めて調査を行ったところ、当館本と外浦部分が一致し、更に内浦海岸の道中絵図を含む資料が、能登中島の蔵宿であった橋本家に伝わることが明らかになった。

所蔵者のご厚意により実見させていただいたところ、計３冊の折本で、⑴外浦道中絵図の一冊、⑵当館本にはない内浦道中絵図に加え「所ノ口ヨリ和倉田鶴濱へ至る之図」と題された絵図と計３図の真景図（先頭から「真脇弁天」、「小口田岸村ヨリノ見込」、「妙観院」）を収める一冊、⑶当館本と同じ計10図の真景図を収める一冊からなることが確認できた（⑴⑵は合わせて「能登国海岸風景図」、⑶は「能登国風景図」の仮題あり。以下「橋本家本」と総称）【図５】【図６】。当館本は橋本家本と書入の筆跡が酷似しており同一筆者と見られるが、彩色が薄く筆致が若干荒いこと、もとは「まくり」で伝わったことを加味すれば、橋本家本に対し下絵ないし控えに当たるように思われる。

橋本家本においても制作経緯を示す文字情報などは認められなかったが、同家に一式として、能登沿岸の実測図である「能登国海辺筋村建等分間絵図」（七尾市指定文化財）・「七尾湾海岸図」、沖合水深の計測記録である「能州筋海岸村々丁間海立浅深調理」が伝わることは注目される。これらの記録は嘉永２年、幕府が異国船の来航増加に危機感を覚え、諸藩に水深を記した海岸絵図の調進を命じたことに関わると考えられる。興味深いことに「能登国海辺筋村建等分間絵図」は嘉永３年７月の年紀が認められ、越中の測量家・石黒信之（1811-52）が藩命で編集した「加越能三州海辺筋村建等分間絵図」（金沢市立玉川図書館、国会図書館蔵）の能登部分に合致している。嘉永３～４年にかけて石黒は所口郡代の能登巡見に随行するなどし、当地の海岸絵図を整えていたことが判明している。橋本家は遡る天保14年（1843）および弘化４年（1847）の所口郡代による巡見において中島の本陣を務めており、橋本家本を含む諸資料は幕末の加賀藩が実施した海岸防備策との関わりの中で収集されたと想定される。

三、前田斎泰の能登巡見

一方で「能登名跡図」の主眼はあくまでも能登の景勝を巡り楽しむことにあり、海防危機という緊迫した状況とは乖離した雰囲気がある。こうした資料の性質は何を示唆しているのだろうか。

嘉永６年４月４日～25日、加賀前田家第13代・斎泰（1811-84）は能登巡見を実施した。藩主直々の能登入りは初めてのことであり、人足を含め約900人が外浦筋から北上し内浦筋を南下する一大事であった。当然、この巡見は時勢を受けたもので海岸線や台場・燈台の現地確認を目的とするが、その合間には積極的に滝巡りや登山、漁業の見物などを行っており、物見遊山的な雰囲気は否定できないものであった。また藩主自ら能登に訪れることで、財政難の藩が多数の献上品を受けることに成功したことから、その目的は海防に留まらないという指摘もある。ちなみに、この時も中島の橋本家は本陣を務めていた。

藩主にとって巡見は領地と民に対する為政者としての自覚を育む重要な機会であり、江戸時代後期に至るとその様子を藩主自ら詩歌に詠む、あるいは絵画化させることが盛んに行われていた。「能登名跡図巻」は斎泰が目にした能登の景勝地の数々を網羅するものであり、殊に真景図の題材に採られた深見の桜滝や西二又の男女滝は難所を越え、特別に見物に至った場所であった。このことを踏まえれば、藩主の巡見と何らかの関係をもつ資料である可能性は高いように思われる。ただし、斎泰が「能登名跡図巻」には登場しない場所、例えば大沢の桶滝などを見学している事実もあり、当該の巡見そのものの様子を描いたとは言い難い部分がある。今後更なる検討を要するが、ここでは巡見の前段階における下調べに関わるものである可能性を、更に踏み込めば、斎泰やその周囲が未踏の地・能登に対する理解を深めるために用意させた可能性を提起しておきたい。

【図５】橋本家本「能登国海岸風景図」（九十九潟 部分）（個人蔵）

【図６】橋本家本「能登国海岸風景図」（妙観院 部分）（個人蔵）

催し物案内 Information

展示解説や各種講座などの情報をお知らせします。
※各種催し物の詳細については、当館ホームページにてお知らせします。

5月　休館日：なし

13日（土）　石川の歴史遺産セミナー（リレー講義）
「日本海沿岸の潟湖と弥生時代の拠点集落」
講師：髙橋 浩二 氏
（富山大学学術研究部人文科学系教授）

20日（土）　れきはくゼミナール
「舶来品でたどる古代の日本海交流」
講師：三浦 俊明（当館資料課長）

21日（日）　碧（あお）の海道－古代の日本海交流－ ワークショップ
「ミニ銅鐸をつくってみよう！」

27日（土）　石川の歴史遺産セミナー（リレー講義）
「二仏並座像の謎に迫る －渤海建国の地と日本道」
講師：小嶋 芳孝 氏
（金沢大学古代文明・文化資源学研究所客員教授）

6月　休館日：6/12(月)～6/16(金)

石川の歴史遺産セミナー（リレー講義）　聴講無料 要申込

「碧（あお）の海道 －古代の日本海交流－」展示解説　要展覧会チケット 当日先着順
5月7日(日)・5月14日(日)・6月4日(日)

「碧（あお）の海道 －古代の日本海交流－」ワークショップ　参加無料 要申込

いしかわ歴史講座　受講無料 当日先着順 全11回
11月から1月、木曜日に実施。当館学芸員が、常設展示の内容を中心にお話しします。

れきはくゼミナール　受講無料 当日先着順 全11回
月1回～2回、土曜日に実施。当館学芸員が、独自のテーマを設定して講義します。

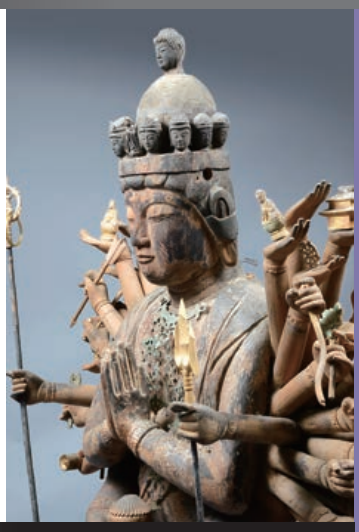
古文書講座　受講無料 要申込 随時開催
当館学芸員が、古文書の読み方や内容を解説します。

次回展覧会のお知らせ

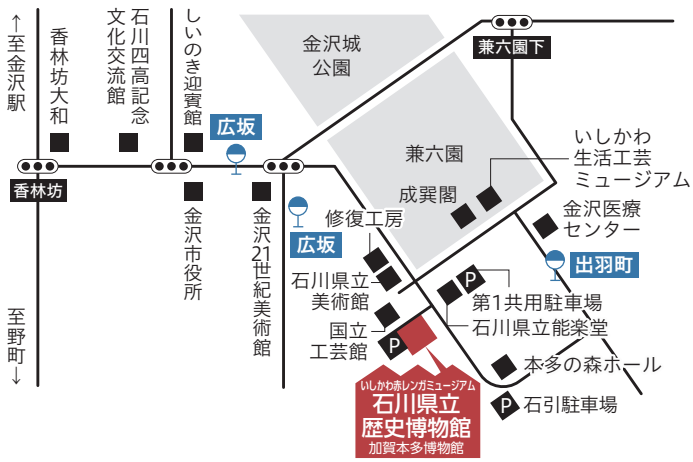
夏季特別展
いしかわの霊場
－中世の祈りとみほとけ－

令和5年(2023)　7/22(土)～9/3(日)

霊場とは多くの信者の参詣を許す開かれた聖地のことです。平安時代後期に全国的な霊場が成立すると、続けて各地で小規模な霊場が出現します。そこでは多くの参詣者を迎え、活発な宗教活動が行われていました。石川県下でも白山や石動山をはじめ多くの霊場が生まれ、その一部は寺院や神社として存続し今に至ります。
本展では石川県内における霊場の発生と展開を、今に残る霊場を中心に紹介し、参詣した人々の「祈り」を見つめます。



石川県指定文化財　木造千手観音立像(部分)　平安時代中期　10～11世紀　穴水町 明泉寺蔵 ▶



いしかわ赤レンガミュージアム
石川県立歴史博物館
ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-1
TEL：076-262-3236　FAX：076-262-1836
E-mail：rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp
https://ishikawa-rekihaku.jp/

広告
石川県立歴史博物館「石川れきはく」に広告を掲載してPRしませんか？
サービス・集客
れきはくメイト(友の会)会員、学校、博物館、図書館、その他公共施設へ 配布!!
ターゲットを狙った知名度向上
石川県立歴史博物館の信頼度の高い広報媒体
お問い合わせは 株式会社ジチタイアド ☎092-716-1401
福岡県福岡市中央区薬院1-14-5 MG薬院ビル7F 財源確保 検索
※株式会社ホープの広告事業は、2021/12/1付で「株式会社ジチタイアド」に分社化しております。